

解説

百人一首 綴葉装写本二冊 一五八×三

箱書に「自讃歌 百人一首 東野州筆」とあり、了延「東下野守常縁筆」の極札が付く。墨付四十二枚一面八行書。本文十九枚に自讃歌二十三枚を後に付ける。表紙は梅鼠地に銀切返し金揉、見返は白茶地に銀芒金銀揉砂子をおく。外箱に「観瀾閣（仙台藩伊達家）藏品印」の貼紙がある。東常縁（二四二―二四四か）は本姓平氏。千葉介常胤の子胤頼を祖とする。上総国香取郡東庄を領して、東氏を号した。二代重胤が源実朝に仕え、和歌を定家に学び、以後歴代武家歌人として聞こえた。常縁は文安六年（二四九）正徹を訪ね、翌宝徳二年堯孝の門に入る。文明三年（二四一）宗祇に『古今集』を講じ、古今伝授の創始者と目される。文明五年頃下野守となり、東野州と称した。『東野州聞書』、『新古今集聞書』の著がある。